

序

「臨床皮膚科」誌は一般開業の先生方にも随分広く読まれているすぐれた専門誌である。その本誌が皮膚に関する電子顕微鏡像の特集号を再度にわたり公表する編集責任者にまず敬意を表する。

しかしこのような企てもあながち不自然なこととは言いだない。と言うのは電顕像とか、微細構造などの言葉は皮膚科の一般演題から徐々に消えつつあって、光顕像と同様にどの論文にも顔を出しつつある状態になつて来たからである。したがって誰もが電顕像というものを光顕像と同じように知らなければならない世の中になつて来たというわけである。

ところがかく言う私も電顕学には全くの素人で本誌の読者一般と何等変るところがない。立場上、受動的にしるデスマゾーム、ライソゾーム、トノフィラメント、バーベック顆粒などの言葉を聞かされているだけで、その何物たるかはもちろん詳細には知らない。

昭和42年10月に日本皮膚科学会第18回中部連合地方会を大阪市立大学でお引受けすることになり、その前日に電顕研究会を開催した。編集、進行その他運営については大阪大学皮膚科に多大の御援助を受けた。この機会に電顕研究会なるものを傍聴出来たことを私は大変よろこんでいる。その理由は、

1) 同好の人人の集りである。

大きな学会がこのような型式をとりつつあることでもわかるように理想的のものと思う。

2) 演説時間が多く（逆に演題が少いとも言える）、とくに討論に十分な時間をとつてあること。

これは翌日の中部連合地方会に比して、うらやましい限りである。どんな些細な疑問点でも討論され、あるいは考え方が発表され、本当に学問というものが血となり肉となるような感じがする。

3) 電顕分野には未知の点が多く、自由な解釈が出来る。

これは素人の私が感じたことで誤りがあるかも知れないが、特殊のものを除いては固定した考え方はなく、どのように考えても差し支えないようである。私は（あるいは不可能な事かも知れないが）カラーの電顕像の成功を望む。それは光顕像がカラーであるため、電顕の黑白よりは解釈が狭められている。モノクロームで表現される電顕像には極端な言い方をすれば、同じ形態のものでも全く異つた機能を持つかも知れないという疑問と興味がある。これはカラーである光顕像でも言えることだが電顕像よりは遙かに制限される。これらのことはすべて形態学の悲しい宿命でもある。

以上序文にならない序文を記したが、素人が電顕学に対する夢と感想を述べることにより、電顕には余り縁のない一般皮膚科医の共感を少しでも呼ぶことにより、電顕学の同好者の増えることを望んで止まないと同時に本号は同好者にとつては、またとない良書となることを信じて疑わないものである。

最後にもう一度「臨床皮膚科」誌関係の方々に深謝する次第である。

昭和43年4月 於 大阪

大阪市立大学教授 齋藤忠夫